新芽（太田義一）△待宵草（江森大〔天〕壽）△幽邃（鶴田機水）△雨あがり（山脇皜〔雲〕雪）△朧月（石島古城）△冬（勝田蕉琴）△柏にインコ（渡邊香涯）△墨畫山水（本多天城）

（『東京美術学校校友会月報』第十二巻第二号）

翌大正三年は十月に開校満二十五年紀念行事があったため展覧会は見合せ、翌四年三月十九日より四月九日まで竹の台陳列館で第三回展が開かれ、一八八点が陳列されて五四〇〇人の入場者があった。買上品については上記月報第十四巻第一号に

宮内省御用品

蕭寺訪道　鈴木　雪哉筆

冬　中村　如等筆

雪の渡場　竹の下舊俊筆

皇后宮職御用品

水墨山水　小島　獨山筆

殘照　吉原　雅風筆

殘雪　岩田　正巳筆

と記されている。

同年末、同会は解散し、東台美術会という新組織が成立した（670頁参照）。

⑫ 小林万吾留学

西洋画科助教授小林万吾は明治四十四年二月三日、文部省より満三ケ年フランス、イタリア、ドイツ留学を命ぜられ、同年四月二十六日出発。六月十六日パリに到着し、画室を借りてそこを本拠に博物館や寺院、諸展覧会を見学し、イギリス、ドイツ、イタリア、スペインを旅行。帰途にロシアへも立ち寄った。大正三年六月三日帰国。『東京美術学校校友会月報』には彼がフロレンスで水谷鉄也その他の知人と会合した記事（第十二巻第三号）や、帰国後彼が『東京朝日新聞』に寄稿した「一頭地を抜く仏国の画界」および『毎日新聞』に寄稿した「欧洲見聞記」の抜粋（第十三巻第三号）の要旨が紹介されており、また、『美術新報』第十三巻第十、十一、十二号に彼は「滞欧中の所感」を寄稿しているので、留学生活の一班を窺い知ることができる。なお、東京芸術大学芸術資料館には彼の留学中の模写であるシャルダン作「カルタの城」、ゴヤ作「灰色の服の婦人像」（いずれも大正四年買入れ）、シャヴァンヌ作「貧しき漁夫」（大正三年生産）が収蔵されている。

⑬ 白馬会解散

本校西洋画科と密接な関係のあった白馬会は、所期の目的を達成したことと個人主義に徹すべき時代になったことを理由に明治四十四年三月八日に解散を決議した。これについて同年三月十日付『国民新聞』は次のような記事を掲げている。

◎洋畫界の異彩

白馬會解散す

黒田清輝氏の談話

去る廿九年の創立以來我國洋畫會に多大の貢獻をなし且常に氣運の先導者として重きをなしたる白馬會は時勢の推移に鑑み此際斷

然解散する事に決し八日總會を開きて協議したる結果全會一致を以て解散を決議し近々櫻花繚爛の日を卜して

▲盛んなる解散の式を擧ぐる筈なるが此種の事は往々誤謬を傳へられ易きを以つて其明瞭なる理由は追て發表する趣なり　右に就きて同會の主腦たる帝室技藝員黑田清輝氏の座談を聞くに「白馬會は現在外國に在る者と地方の者とを合して會員三十餘名で四月には久米桂一郎三宅克己氏等が歸朝する　實は此人々が歸朝してから會の所思を天下に發表して解散すると云ふが全會の意思である

乃で主なる理由と云ふは現今會員中の者には大分拔群の技倆を有する者も出來思想の變遷も累ねたので私共が當初期した事も著々有終の美果を收めた樣である

譬へば我々は油畫とは何麼なるものであるかと云ふ事を知しめる時代に起り畫家とは斯う云もので展覽會は斯樣云風にして開くものと嗚呼し乍ら其等の標準を示す爲めに主義主張を以て此團體を續けて來た　所が二三年以來私共の希望して來た公設展覽會も設立され私共の會員の大多數は外國で學んで來た人々となり今は彼標準を示す必要も無なつた　加之世間の人にも油繪が好く解得され同時に鑑識力も一般に進めば製作品を見せる場所も立派に出來上つて居る　されば此時に當つて

▲各畫家の特長を示すには團體よりも個人的にする方が適當ではあるまいか　元來畫家は個人の利益とか名譽とかは不問にして只管美術と云ふものに向つて一身を捧ぐ可きものであるが團體は兎角誤認され易い　それであるから終りは後進を誤り自分を誤る結果を生じはすまいか氣遣れる　又私共が明るい時勢に適合した畫を作らねばならぬと云主義は今では畫界の風潮となつて居て最早團體的の研究を俟ないので白馬會が特に繼續して仕事をする必要はないのである　故に爾後からは各志の赴く所に從つて驥足を伸す時代ではあるまいかと云ふのが今回解散するに至つた理由で有る　併し相談するとか遊ぶとかと云ふ意味に於て此會を存續するは又別問題である〔一〕猶此會の創立者は久米、小代、安藤、佐野、岩村、故山本、合田、吉岡、長原、藤島、湯淺、白瀧、小林、中澤、北、和田（英）、岡田、和田（三）等の諸氏である

なお、旧白馬会の中沢弘光、山本森之助ら比較的若手の画家たちは翌四十五年六月に光風会を結成し、第一回展を開く。一方、黒田清輝、岩村透らは大正二年三月に洋画家を中心とする国民美術協会を結成し、他の分野の美術家も糾合して新たな団体活動を始める。

⑭　アブサント同人小品展覧会・後期印象派

明治四十四年五月二十日と二十一日の両日、本校日本画科、西洋画科の生徒有志一六名は本郷の帝国大学前の喫茶店パラダイスでアブサント同人小品展覧会を開いた。岡畏三郎はこの展覧会について「後期印象派の影響をうけた人々のグループ展としては最も早いものではなかったか」（「明治末年に於ける〈新傾向〉に就いて」『美術研究』一六〇号。昭和二十六年三月）と言い、その歴史的意義を指摘している。また、陰里鉄郎「万鉄五郎―生涯と芸術」㈠～㈤（同誌二五五、二五八、二六二、二七二、二九〇号。昭和四十三年一月～同四十八年十一月）